

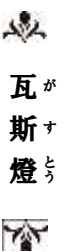
KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 83 号 平成 28 年 7 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



旧ハッサム邸の前庭に建つ2基の瓦斯燈



明治七年（一八七四）ブラウン商会によって神戸の居留地に瓦斯燈が設置され、オイルランプの街灯に代わって居留地の夜を照らしました。蟬燭のあかりに慣れていた当時の日本人にとって、瓦斯燈の明かりは、文明開化のひとつといわれました。

明治二十一年（一八八八）に市街地では、電燈が普及し始めますが、瓦斯燈のあった居留地では、電燈の普及が遅れます。電燈へと切り替わるにあたっては、景觀に配慮して、電線は地下へ埋め込まれました。この伝統が生かされ、現在でも旧居留地内には電柱が無く、すっきりとした市街地景觀となっています。

電燈の普及と共に居留地内では、瓦斯燈が姿を消しますが、一九六〇年代までわずかに残され、居留地の移り変わりを見守り続けていました。開港百年を記念して旧居留地内に設置された瓦斯燈は、当初のものを移築し、一部復元したものです。ロンドンのターナー・アンド・アーレン社製のオリジナルの日本最古級の瓦斯燈は、『ガス燈のある街・旅』にも紹介され、相樂園内の旧ハッサム邸の前に今も残されています。

大変を生きる—日本の災害と文学 小山鉄郎（作品社）

共同通信社の記者である著者が、東日本大震災の二か月後から一年間、新聞連載した内容を再検討し全面的に書き直して書籍化した。

目次には「安政地震と「鯨絵」—出久根達郎、仮名垣魯文」「谷崎潤一郎『細雪』と阪神大水害、その報道管制」「巨大地震を阻止した、かえるくんの「ぼく」と「非ぼく」—村上春樹」など二十七の項目が並び、古代・中世から現代までの自然災害を描いた文学作品と災害の姿を追っている。

文章の記憶は、読者の心に深い印象を残し、知識としての情報以外に、災害時に助けとなる何かを喚起してくれるのではないかと、という期待が込められている。



神戸七福神めぐり 編（朱鷺書房） 神戸七福神会

神戸七福神霊場は神戸開港二〇年を記念し開創された。「神戸七福神霊場案内」では、豊富なカラー写真と語りかけるような文章で各社寺の歴史や祭神の由来、宮司任職たちの七福神の話などが説明され、まるで社寺の中を案内されているような気分が味わえる。

「神戸七福神のめぐり方」では、周辺の観光名所に立ち寄り各社寺を巡拝するプランを紹介する。本書を片手に巡ってみると楽しい。

ホームホスピス「神戸なごみの家」の7年—「看取りの家」から「とも暮らしの家」に 松本京子（木犀舎）

「神戸なごみの家」は、単に死を看取る場所ではない。死は日々の暮らしの延長線上にあると考え、住人（患者とは言わない）がこれまで通り自分らしく暮らすことをめざす。スタッフは、マニュアルが通用しない事態に右往左往しながらも、住人の伴走者であり応援団であろうと奮闘する。

人生の最期をどこでどのように迎えたのか、あらためて考えてみたくなる。

住友春翠 泉屋博古館編集・発行

住友家の第十五代当主として、

住友財閥の事業拡大と近代化を導いた春翠は、美術品の蒐集家としても知られている。本書は、彼の生誕一五〇年を記念した企画展示に合わせて作られた。

一部では、明治期に蒐集された洋画や中国青銅器とともに、その鑑賞の場であった須磨別邸の様子が、二部では、大正期に建てられた茶臼山本邸を中心に、和の伝統美である茶道具や日本画の数々が紹介され、春翠の美意識の有り様と、その文化活動の足跡を辿る。

ひょうごの在来作物—つながっている種と人 ひょうごの在来種保存会 編（神戸新聞総合出版センター）

在来作物とは、農家が自家採種し、連綿と作り伝えてきた農作物。希少となった品種を保存し次世代へ引き継ぐことを目的に活動するのがひょうごの在来種保存会で、本書では丹波黒大豆はもちろん、ハリマ王にんにく、マチコねぎなど九十種が紹介される。由来や歴史の説明に加え、作り手の思い、エピソードが満載。入手時期や方法、調理法の情報もうれしい。

よみがえった茅葺きの家 計集団編（建築ジャーナル）

神戸市の登録有形文化財第一号で、かつての田園風景の面影を今も残す茅葺きの家。くらがり街道とも呼ばれた北区の旧街道沿いに建つその民家が、高速道路の建設にともない、壊すか移転かの選択を迫られる。

本書は茅葺きの家の持ち主が移転を決意してから、移築・再生するまでの三年間の記録をまとめたものである。写真や図が数多く収められ、計画が進んでいく過程が視覚的にもわかりやすい。また、さまざまな立場から茅葺きの家を残す意義が語られていて、日本の風土にあった伝統技術の素晴らしさが伝わってくる。



母娘餅 ははこもち 後藤康子（澤標）

大分で生まれ育ち、神戸に嫁ぎ四十年近くになる著者が、故郷大分に住む母のこと、家族との思い出、そして第二の故郷神戸での、さりげない日常や出来事を綴ったエッセイ。

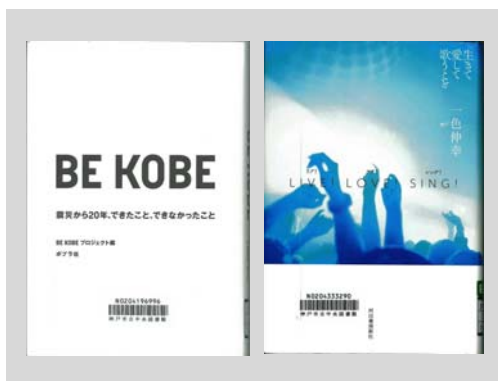
表題作「母娘餅」は、年末に帰省し、母と共に餅を作る様子を描いた作品である。老いを感じさせながらも、久しぶりの餅つきに生き生きとした母の姿や、思い起こされる、幼いころ家族と過ごした年の瀬の暮らしが語られる。

LIVE! LOVE! SING! —きこり愛うっ
歌（うた）一色伸幸（河出書房新社）

東日本大震災の後、福島から神戸に避難してきた女子高生の朝海（あさみ） 阪神・淡路大震災から復興した神戸の街に複雑な心を抱いていたとき、突然、かつての同級生から連絡が入った。ばらばらになった友達が集まり向かった先は、あの日以来足を踏み入れていない故郷福島。懐かしい景色、家、小学校を巡り、思い出を掘り起こす旅を終え、神戸に戻った主人公が、過去を乗り越え未来に向かって歩き始める物語。

BE KOBE—震災から20年、できたこと、できなかったこと BE KOBEプロジェクト編（ポプラ社）

タイトルのBE KOBEは、震災20年を機に作られた市のロゴマーク。冒頭に「BE KOBEとは、阪神・淡路大震災以降に、神戸で生まれた教訓や知恵を共有し、外に向けて発信することで、市民が誇りを持ち、世界に貢献できる街となることを目指す取り組み」とある。震災から二十年が経ち、震災の教訓は標語やスローガンでは漠然としたイメージしか伝わらない。本書は、震災を経験し今も街にかわり続ける十組十三人のインタビュー集で、一人一人の言葉から切実な思いが伝わってくる。



II その他の新刊 II

- ラフカディオ・ハーンの魅力 西川 盛雄（新宿書房）
- 兵庫・旅の便利帳—歩く旅を楽しむ 柴田泰典（風詠社）
- 三田青磁小皿と出石の長徳利 手島 隼人編（神戸新聞総合出版センター）

神戸 その⑦
あんな人こんな人

網屋 吉兵衛 あみや・きちべえ
天保5年（1785年）～明治2年（1869年）

網屋吉兵衛は、江戸後期、私財を投じて本格的な船たで場を神戸村字安永新田、現在の新港第一突堤あたりに造りました。船たで場は、船底についた船虫や貝殻を取り除き、腐食を防ぐため船底を燻す作業場です。

二ツ茶屋村ふたつちやむらで生まれ、11歳で兵庫の荒物屋の丁稚になり、のちに呉服屋を営みます。まだ少年のころ兵庫に船たで場を造ることを決心し、仕事が終わると兵庫の浜へ行き、潮の干満や海底の様子などを調べていました。長きにわたり研究を続け、嘉永7年（1854）69歳のとき、ついに念願がかなない船たで場の工事が始まり翌年の安政2年（1855）に完成をみます。その後も改良に努めますが、事業による巨額の負債を抱え、生涯かけて造った船たで場を手放すこととなります。

文久3年（1863）将軍家茂が兵庫を視察した際、謁見した吉兵衛が神戸は開港場として適地であると進言したと言われています。船たで場は勝海舟の海軍操練所に組み入れられ、その後、神戸港の東運上所の舟入場となり活用されました。神戸築港の第一歩は吉兵衛の小さな船たで場であったと言えます。

参考：『開港三十年史』（開港三十年記念会 1898）

『兵庫県人』黒部享著（新人物往来社 1976）他



1968年に浄財で建てられた網屋吉兵衛顕彰碑（新港第一突堤）

神戸開港前夜

平成二十九年(二〇一七)神戸港は開港一五〇年を迎えます。一五〇年前といえば、時代は幕末、その頃の神戸はいったいどんなところだったのでしょうか。開港以前の神戸浦について、明治三十一年(一八九八)に出版された『神戸開港三十年史』にはこう書かれています。

「兵庫の市街(兵庫津、現在の兵庫区の湾岸あたり)を離れ「中略」更に東に行くと、走水村で民家が百四十数戸。更に進むと二ツ茶屋で、民家は三百もない。これより東が神戸村で、前の二つの村に比べると大きな村だが、五百戸を越える数ではない。この三村は兵庫と同じく天領だった。三村の中央を西国街道(今の元町通)が通っており、家々が軒を連ねている。粗略な家屋が多く、二階のある家は少ない。(意訳)」

隣の兵庫が幕末の頃には人口が二万近い大きな町であったことに比べると、小さな村だったことがわかります。明治元年(一八六八)に、この三村が合併し神戸町となりました。

「神戸」以外の地名はなくなってしまうましたが、元町通の一本南の筋に建つ神社は、明治八年(一八七五)に八幡神社を合祀した際に、旧走水村にあったことから走水神社と改称されました。

嘉永六年(一八五三)アメリカの東インド艦隊総司令官ペリーの来航を機に、長く続いた日本の鎖国体制は終わりを迎えました。翌安政元年(一八五四)に「日米和親条約」を締結。安政五年(一八五八)に徳川幕府とアメリカ合衆国が調印した「日米

修好通商条約」で、長崎、神奈川、新潟、箱館(函館)とともに兵庫の開港も取り決められました。続いて、蘭・露・英・仏の4ヶ国も同様の修好通商条約を結びます。しかしこの条約は、京都に近い港を開放することに難色を示した朝



『武庫連山海陸古覽』海から見た開港前の兵庫津(左)と神戸(右)

貴重資料デジタルアーカイブズより

廷の承認を得ることができず、兵庫と新潟の開港は遅れることになりました。後に幕府は、欧州に使節団を派遣、各国との交渉の末、条約履行と関税軽減を条件に開市開港を一八六三年一月一日より5年間延期する協定を結びます。

この頃になると、開港前の兵庫沖にも外国船が現れるようになります。嘉永七年(一八五四)九月、突然ロシア軍艦ディアナ号が兵庫津に進入するという事件が起こりました。当時の人々は、驚くよりもかえって珍しがり、見物の船を出して御番所より差し止められたとの記録が残っています。文久元年(一八六一)には、初代駐日イギリス公使オールコックが船で兵庫津に上陸、薬仙寺の世尊庵に宿泊し、翌日兵庫津を見て回りました。彼は、その時の印象を自著『大君の都』に記しています。

紆余曲折を経て、慶応三年(一八六七)五月、開港の勅許が下り、兵庫開港が確定しました。ただ、開港場が当初の取り決めである兵庫ではなく、神戸に変更された理由がわからず、神戸に変わっていません。当時の資料が残されていません。当時の状況を考えると、兵庫津近辺は人家も多く用地の確保が難しいが、神戸には土地の余裕があったから、西国

街道の宿場町であり人馬の往来も多い兵庫では住民と外国人との衝突が避けられないと考えられたから、といった推察がなされています。

慶応三年十二月七日(一八六八年一月一日)神戸港の開港式は、新しく建設された運上所(今の税関)で各国公使と幕府役人の列席のもと行われました。運上所は、当時としては珍しい洋館で、窓ガラスが目立つ外観から「ビードロの家」と呼ばれ多くの見物客を集めたと伝えられています。海上では、数日前から神戸沖に停泊していた外国軍艦十八隻が正午に合わせて礼砲二十一発を放ち、街中では開港を祝う人々が、当時流行していた「ええじゃないか」を踊って練り歩き、たいへんな賑わいを呈したとのことです。

急激な時代の変化の中で、世界に開かれることとなった神戸港。西国街道沿いの鄙びた農・漁村にすぎなかった神戸は、開港とそれに伴う外国人居留地の造成によって、国際貿易都市として目覚ましい発展を遂げることとなります。

参考文献

『新修神戸市史 歴史編Ⅲ』『増訂神戸の歴史 通史編』『増補国際都市神戸の系譜』他